

群衆バイアスモデルは 帰属可能性としての道徳的責任を配慮しうるか

薄井 尚樹 (Naoki USUI)
三重大学

潜在的態度 *implicit attitude*、とりわけ集団間の潜在バイアスをめぐる研究は、過去 20 年にわたりおおきな進展を遂げてきた。しかし B. Keith Payne et al. (2017) は、そうした研究から生じる 3 つのパズルを指摘する (Payne et al., 2017, pp. 233-235)。(1) 潜在バイアスの平均的なレベルは反復可能であるにもかかわらず、潜在バイアスそのものの時間的な安定性はとても低いことがわかっている。それでは、諸個人の潜在バイアスが変動するのに、なぜ平均的な潜在バイアスはそれほど安定しているのか。(2) 児童と大人の潜在バイアスのレベルはほとんど変わらないことがわかっている。このことはしばしば、潜在バイアスが発達のはやい時期に獲得されてずっと保たれる証拠とみなされてきた。しかし (1) にあるように、潜在バイアスは時間的に安定していないのに、そのバイアスはどのようにして発達において不変的でありうるのか。(3) 潜在バイアスの個人差と行動とのあいだの結びつきはわりあい弱い。他方で、個人レベルではなく、国家や大都市圏といった集団レベルになると、その結びつきははるかに強くなる。

Payne たちはこれら 3 つのパズルを解消する説明として「群衆バイアスモデル *the bias of crowds model*」を提案する (Payne et al., 2017, pp. 236-237)。それによると潜在バイアスは、スタジアムで生じるウェーブのように、諸個人の心にあるというよりむしろ諸個人の心を通過する社会現象だと理解される。このモデルだと、潜在的測定は「個人」よりむしろ、それをとりまく「状況」を測定していると理解されることになる。それゆえ、個人レベルでの潜在バイアスは測定時点ごとの個人に特異な状況により不安定になりうる一方で、集団レベルの潜在バイアスは、集約されることでそのような個人ごとの特異性が消去され、その集団の地域でもっとも一般的な状況を堅固に反映することになる。

こうした状況主義的な見解は、潜在的態度からもたらされる行為の道徳的責任について帰属主義 *attributionism* の立場をとる論者 (e.g., Brownstein, 2016) に問題を提示する。帰属主義によると、ある行為はその行為者の安定した「本当の」自己を反映しているときその行為者に帰属可能であり、そのときはじめて私たちは、その行為の道徳的責任をその行為者に帰属できるとされる。このように帰属主義は安定した自己の存在を前提とする。しかし、群衆バイアスモデルが示唆するように、私たちの潜在的態度が状況しだいであらわれたり消えたりするようなものだとなれば、そのような心的状態は先の意味での本当の自己に属しておらず、それゆえそこから生じる行為の道徳的責任について、帰属主義は否定的にしか述べることができないように思われる。

本発表で私は、群衆バイアスモデルのもとでの「帰属主義の想定する責任帰属の可能性」を検討する。つまりそうした状況主義的な見解のもとで、道徳的評価（とりわけ責任の帰属）を可能にする「自己」はどのように理解されうるのかを考察することにしたい。

本研究は JSPS 科研費 JP18K00013 の助成を受けたものです

参考文献

- Brownstein, M. (2016). Attributionism and moral responsibility for implicit bias. *Review of Philosophy and Psychology*, 7(4), 1–22.
- Payne, B. K., Vuletich, H., & Lundberg, K. (2017). The bias of crowds: How implicit bias bridges personal and systemic prejudice. *Psychological Inquiry*, 28(4), 233–248.